九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

突厥の瓦解・渤海の靺鞨諸族併呑と小高句麗国の九州増領

日野，開三郎

https://doi.org/10.15017/2331279

出版情報：史淵. 81, pp.67-92, 1960-05-15. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

突厥の瓦解・渤海の靺鞨諸族併呑と小高句麗国の九州増領

日野開三郎

久しく塞外に覇を称へ、堂々大唐をも圧迫して居た復興突厥は、闕特勤に続く毗伽可汗の死によつて遽に衰へ、開元二十九年、毗伽可汗の子の登利可汗の被殺を最後として全く瓦解し去つた。復興大突厥は史上稀有の強盛を誇る大帝国として久しく内外を強圧して居ただけに、その急激な瓦解は凡ゆる方向に大きな影響を与へ、極東満洲の地にも大変化を捲き起さしめた。その第一は渤海が純通古斯系靺鞨諸族を併呑して長年の宿願を達したことであり、第二は小高句麗が渤海に併呑せられた靺鞨諸族中の亡命者を多数迎へ入れ、それらを統治する為めの都督府や州を置き、領州を増加したことであり、第三は突厥との対峙から解放せられた唐の軍事的余力がそれだけ東北面控制力の強化に振向けられたことである。以下、かうした変化を小高句麗国史の立場から考説する。但し第三の変化は章節を更めて扱ふこととし、此所では第一と第二とを論ずるに止める。

第一節　突厥の瓦解と渤海の靺鞨諸族併呑

純通古斯系靺鞨諸族への勢力伸張を念願して好機を窺ひつつあつた渤海王大武芸は、此れに最も強力に抵抗してゐた黒水靺鞨やその他の靺鞨諸族に対して唐が庇護的態度に出たことを憤慨し、黒水問題をきつかけとして遂に純通古斯系靺鞨

諸族の唐への入貢を一切遮断し、海軍を送つて山東に寇し、唐との武力抗争をも辞せぬ強硬態度を明かにした。此の入唐遮断は渤海の有つ地理的利点に大きく支へられてゐたとは云へ、只それだけが遮断を完行し得た所以であつたのではない。靺鞨諸族の入唐熱は、その頻貢が証示する如く、極めて旺盛熾烈であつたのであるから、その遮断に対しては斉しく大きな怨みを抱いたであらう。それを敢て遮断したのは、渤海に全靺鞨諸族を一括制圧し得る実力が具備せられてゐたからであると見なければならぬ。然るに強烈な北進の野望を抱き、且つその実力を具備してゐた大武芸も、只彼等の入唐を遮断し、山東を寇掠して鬱憤をぶちまけたのみで、彼等を征服し領内に編入する挙には出で得なかつた。武芸死し、渤海と唐との和解が成立すると共に、遮断以前に入唐してゐた靺鞨諸族が何れも再び旧の如く自らの名に於いて入唐してゐるのは彼等が尚独立を保つてゐた為めで、武芸が彼等の併呑を敢て断行するに至らなかつたことを立証するものである。併呑を強く念願し、且つそれを遂行するに足る実力を備へてゐたと推測せられる武芸が此れを敢て断行しなかつたに就いては、そこにそれ相応の理由があつた筈であり、その理由は、此の際、渤海と諸靺鞨との両当事者以外の第三勢力との関係に求む可きものと思はれる。即ち明かに優勢な渤海の北進を牽制してゐたのは、此の渤海よりも更に優勢な第三勢力であつたと見る外ないのである。そして此の第三勢力として唐を擬てるのは妥当でなく、武威四隣を圧する突厥であつたと解す可きである。

当時、唐の軍備は節度使体制の整備によつて頗る充実してゐたが、それは辺防の安固を主眼とする消極的な受身の体制であつて、長距離遠征の作戦には必ずしも適した体制ではなかつた。突厥・吐蕃の二大強寇を控へてゐた唐としてはその防備の安固をはかるのが精一杯であつて、一方に此の両強寇を抑へつつ、更に長駆して満洲の奥地に遠征を断行し得る裕りは無かつた。かうした情勢は渤海に看取せられてゐた筈で、さればこそ渤海は海軍を送つて唐の登州を寇掠するが如き大胆な挑戦行為をも敢てしてゐたのである。所が突厥の場合はその精鋭が渤海の西境を侵寇する現実的な可能性を多分に

有してゐた。

奥地の靺鞨諸族が開元七年頃から対唐交通に使用したと推測せられる既述の満華交通第二幹線は同時に突厥牙庭への入貢路にも連り、突厥の勢力は此の街道によつて遠く黒水靺鞨に迄波及し、特に毗伽可汗は吐屯を設けたことさへあつたのであるから、渤海が此の街道上に略々東西に連衡する黒水・越喜・鉄利等を専占領有せんとすれば、それは必然的に突厥の此の勢力と衝突することとなる。然も大唐が遠く奥満洲の渤海に征討の大軍を直派し得る可能性は先ず考へられなかつたのに反し、直接界を接する突厥の場合はその危険が大きかつた。古来密林湿潤の満洲と草原乾燥の蒙古とはその作戦の自然条件を全く異にし、従つて満洲の奥地に深く侵入した遊牧勢力の遠征軍は殆んど例外なく悲惨な後退を余儀なくせしめられてゐるが、只満洲の西部地区を浅く攻略することは容易であり、然もそれによつて奥満洲の勢力に迄大きな打撃を与へ、大成功を収めてゐる例は少く無く、現に突厥に就いても何回かの先例が残されてゐるのである。即ち南北朝時代の突厥は扶余地方を臣服せしめ、更にその東方の五常方面を根拠として北満一帯に強大な勢力を振つてゐた大勿吉を瓦解せしめて居り、[註154] 隋末唐初の突厥も扶余地方を勢力下に収め、[註145] 又その衰散後、一時塞外に雄視した薛延陀もやはり扶余地方に勢力を及ぼしてゐた。[註155] 南北朝及び隋末唐初と共に突厥隆昌の三頂点をなし、現に黒水靺鞨に迄勢力を波及せしめてゐた毗伽可汗にさからふことは、膺懲の兵を受く可き危険を伴ふことが渤海には充分感ぜられてゐた筈である。然も黒水問題に端を発して大唐と攻争するに至つた渤海としては、一層突厥との関係を好調に保つて此れを対唐攻争に利用す可き必要があつた。対唐攻争の上に更に突厥と事を構へた場合の渤海の運命は火を睹るよりも明かである。

突厥の対満洲政策は、満洲に於ける渤海の優位を現実の実態として受容れ、渤海の諸靺鞨に対する宗主権を認めるが、然しそれと同時に満洲の覇者としての渤海がそれらの靺鞨諸族を率ゐて突厥に臣属朝貢することを要求し、且つ渤海の靺鞨諸族併呑を許さず、只羈縻関係に止まらしめておく方針であつた。此れに対する唐の満洲政策は、渤海の靺鞨諸族に対

する宗主権を一切否認し、それらをすべて唐の直接羈縻に服する平等の存在たらしめんとするに在つた。渤海の対唐攻争はかうした渤海の宗主権に対する唐の否認政策への不満が爆発したものであり、突厥への親近は渤海の宗主権に対する突厥の容認政策に気を良くしたものであるが、その突厥の満洲政策も渤海の覇権承認を限度とし、それ以上に併呑の挙に出ることは許さなかつたのである。従つて渤海の北進は突厥との衝突を覚悟しなければならなかつたが、それは西部国境の侵略を受けることが予測せられ、対唐攻争の最中としてさうした事態の発生は絶対に避けねばならなかつた。靺鞨諸族の入唐を固く遮断した大武芸が、突厥への往来には手を加へ得なかつたこと、已述の如くであるが、かうした手加減は要するに突厥の武力に対する畏怖と唐の武力に対する軽視とに由つてゐるのであつて、靺鞨諸族の突厥入貢さへ如何ともなし得なかつた大武芸が突厥の意志にさからつて彼等を征服専占するの挙に出で得なかつたことは寧ろ当然であつたと云へる。かくて開元年間には渤海の靺鞨諸族併呑は終に達成せられず、武力膨脹主義の武王武芸も隠忍自重する外なかつたのである。此の様に渤海の北進を阻止してゐたものが専ら突厥の強大な武力のみであつたことを知るならば、突厥の勢力衰退の時機が同時に渤海の北進開始の時期となる可きことは容易に推測せられるであらう。

突厥は開元二十九年に瓦解した。そして渤海は終に靺鞨諸族を併呑してその宿志を達成した。新唐書巻二一九靺鞨伝に、

拂涅・虞婁・越喜・鉄利・黒水等の入貢を述べた後ち、此の伝の最後の締め括りの一句として

後渤海盛。靺鞨皆役属之、不復與王會矣。

とあつて、彼等が何れも渤海に隷属して終つたことを述べてゐる。又同巻の渤海伝に、右の記事を裏書きするものとして、拂涅の故地は渤海の東平府五州（伊・蒙・沱・黒・比）に、鉄利の故地は鉄利府六州（広・汾・蒲・海・義・帰）に、越喜の故地は懐遠府九州（達・越・懐・紀・富・美・福・邪・芝）に編せられたと記してゐる。但し黒水の故地に就いては記す所が無い。此れは拂涅・越喜・鉄利等が何れも渤海の直轄領土に編入せられ、府州制に編成せられたのに対し、特

に勁悍を以て知られた黒水のみは直轄領土への編入を免れ、只渤海の靺鞨に服するに止まり、従つて最後迄黒水の名を保ち得た為めであつて、此のことに就いては嘗て考説した所である。[註157] かくの如く、純通古斯系の靺鞨諸族が或は直轄領民として、或は靺鞨領民として渤海に服属せしめられたことが紛れない事実として立証せられる以上、その征服の年代は何時であつたかと云ふことが問題となる。そして渤海の北進を牽制してゐた突厥が開元二十九年に全く瓦解し去つた事実を併せ考へるとき、それは恐らく開元二十九年以後であり、然も渤海の北進熱から推して二十九年以後の間もない時であつたらうとの推測が生れて来る。然らば開元二十九年以後のどの年代であつたか。此の疑問を解く第一の手掛りは、やはり先に掲げた靺鞨諸族の入唐表である。

開元は二十九年を以て終り、翌れば天宝元年である。入唐表に依るに、開元二十九年迄しきりに入貢した靺鞨諸族は、拂涅・越喜・鉄利等、何れも天宝元年以後全く姿を絶ち、独り黒水のみ入貢を続けてその回数も天宝の十四年間に五回に及んでゐる。大唐は天宝十四年末の安禄山の叛乱勃発まで全盛の形を保つて居り、唐・渤関係も概ね円滑に行つて居たのであるから、靺鞨諸族の入唐表からの消滅事情を前回の場合と同様に渤海の入唐街道遮断による絶貢と見るのは妥当でない。開元二十九年が突厥の瓦解の年であつた事実と結びつけて、渤海が此の機に多年宿願の北進を断行し、彼等を併呑して終つた為めと解す可きである。果して然らば、渤海の北進は突厥の瓦解と殆んど同時に開始せられたこととなる。拂涅・越喜・鉄利等の入唐表からの消滅は、彼等が渤海の領民としてその直轄下に編入せられ、外交の自由を失ひ、入貢は自己の名に於いてでなく、渤海の名に於いてしなければならなくなつた為めでなければならぬから、此の三部は渤海の北進開始と同時に忽ち完全に征服せられ、その直轄領民に編入せられたものであることを察知することが出来る。黒水靺鞨のみその名を入唐表に残存し続けてゐるのは、特に勁悍を以て知られた此の部族のこととて、渤海も軽々しくはその内部に征服の軍を侵入せしめることが出来なかつた為めであらう。黒水も最後には渤海に服属した。然しその実力はよく直轄領民に編入せられることを排し、靺鞨に服する程度に喰ひ止めるを得た。そしてそれが自己の名をそのまま保持し、対外

活動に於いてその独自の存在たることを主張し得た所以であつたと解せられる。対唐交通に於いて地の利を得てゐた渤海もむげに黒水の入唐を遮断し難く、かくて天宝の十四年間に五回の入貢記録を残すこととなつたのである。

渤海の北進年代を探る第二の手掛りは安東都護府の府治の転徙である。開元二年、靺鞨の頻貢が初まり、その管掌が安東都護府の職任とせられた結果、都護府は本来の任たる小高句麗の統轄、渤海の監視の外に、新に純通古斯系靺鞨諸族の羈縻をも扱ふこととなつた。当時の彼等の入貢路は平州に会してゐたので、開元二年、都護府は幽州より平州に移治して此の新状勢に対処した。次いで開元五年、営州の恢復が成つて唐の遼西支配が確立したのと、越えて七年、渤海に武力発展主義の武王大武芸が立つて靺鞨諸族の領内通過を妨げた結果とによつて、渤海の陸上入唐路と小高句麗及び靺鞨諸族の入貢路とが何れも営州に会することとなると、唐は軍事辺防機関たる節度使を新に営州に増置すると共に、都護府をその稍々東方の燕郡城に移して此の新状勢に応じた。かく都護府の移転が両回共に東北辺外の情勢の変化に対応して行はれた措置であることを知れば、続いて行はれた天宝二年の遼西郡故城への都護府移転も亦東北辺外に新状勢が展開した為めの処置なる可きことが察せられる。そしてそれは開元二十九年に初まつた渤海の北進に因る奥地靺鞨諸族の入貢消滅が主であつたと解せられる。靺鞨諸族の入貢消滅によつて都護府の政務は渤海と小高句麗との両国に縮減せられたわけであるが、然も渤海の朝貢道は山東の登州に至る海路が正街道となつてゐたので、都護府の事実上の政務は殆んど小高句麗一国に大きく縮減せられたと見て差支へなかつた。然も純通古斯系靺鞨諸族を併呑した渤海の国力が此れより一段と増強す可きは自明の理であるから、その転進南下を警戒す可き必要が加はり、その為めには小高句麗に対する唐の保護乃至控制を強化する必要があつた。即ち都護府の任は小高句麗一国に集中せられることとなつたわけである。府治を遼西郡故城に移し、小高句麗の西境に近く進出せしめた所以は正にかうした新状勢に対応する措置であつたと解せられる。

安東都護府の燕郡城より遼西郡故城への移転が渤海の占領による奥地靺鞨諸族の朝貢廃絶に対応する措置であつたとす

れば、此の移転の年たる天宝二年は彼等靺鞨諸族の入貢に再開の見込みが無くなつた年、換言すれば渤海の彼等に対する征服占領の態勢が略々完了してその再独立の見込みが無くなつた年であつたこととなる。即ち渤海の純通古斯系靺鞨諸族（黒水を除く）併呑の大事業は開元二十九年に初まつて天宝二年には一段落し、僅かに足掛け三年で此の大目的を果したこととなる。拂涅・越喜・鉄利の広大な地域を足掛け三年ほどで征定した渤海の軍事力とその行動とは強大神速なりと称す可きであらう。突厥瓦解の年たる開元二十九年に忽ち北進の軍事行動に入つてゐるのは、彼等の併呑を早くから念願してゐた渤海が平時より北進の軍事態勢を整へて機を窺つてゐたからであらうが、それが足かけ三年ばかりで占領支配の一切を完了し得たのは、それ以前、既に徐々乍らも彼等の間に渤海の勢力を浸潤せしめる政治工作が進められてゐたからであらう。黒水靺鞨が突厥の吐屯や唐の監押官を懇請して渤海の北進を牽制する支へと為さんとしたのが開元十四、五年頃乃至それ以前であつた事実は、既に此の頃から北進を欲念する渤海の靺鞨諸族の内部に対する勢力浸透工作が進められつつあつたことを物語るものと云へよう。大武芸の宿願であつた靺鞨諸族の併呑が実現せられた此の時には彼は既に世に亡く、第三代文王欽茂の治世となつてゐた。武王は勃々たる野心を抱き乍ら突厥の全盛に圧せられて素志を遂げ得なかつたとは云へ、文王がその遺志をついで好機至ると見るや電光石火の中に此れを達成し得たのは、やはり武王時代から整へられてゐた北進準備の態勢や諸工作のお蔭であつたと云はねばならぬ。

遅くも天宝二年には一段落したと思はれる渤海の靺鞨諸族に対する占領支配の体制は、その後ち多少の波瀾曲折はあつたにせよ、概ね順調に強化確立せられて行つた様である。此の支配体制の強化確立過程を窺察する第一の史料は日本側の文献に伝へられる彼の地からの亡命事件である。続日本紀巻一六 天平十八年（七四六）の条に

是年。渤海人及鐵利、惣一千一百餘、慕化來朝、安置出羽國、給衣糧放還、

とあつて、鉄利人が渤海人と共に総勢一千一百余人の群を成して日本に渡来してゐる。此の渡来は入貢や貿易の為めでは

なく、帰化永住の来役で、明かに亡命の徒であつたと解せられる。亡命の所以はしばらく措いて、先づ此所に注意せられるのは、鉄利人が渤海人と共に亡命の一団をなしてゐることである。かうした渤海人と鉄利人との一体化は何を意味するか。かう考へて彼等の亡命の年たる天平十八年を検討するに、それは唐の天宝五年に該当し、従つて渤海が鉄利靺鞨を併呑した開元二十九年から僅か五年の後ちに当つてゐる。所で渤海の靺鞨諸族に対する支配は遅くも天宝二年には実現せられてゐたと解せられること、先述の如くであるから、五年に鉄利人と共に亡命した右の渤海人は此の鉄利靺鞨統治の為めに現地に派置せられた渤海人を主体とする者であつたと見る可きであらう。彼等現地派置の渤海人がどの様な組織、権限を以て被支配層となつた鉄利人に臨んでゐたかは明かでなく、又その追究は渤海史上の問題として敢て此所に取上げる必要もないので省略するが、とにかく彼等を現地派置の渤海人と見ることには殆んど疑ひの余地はないであらう。果して然らば、渤海は純通古斯系靺鞨諸族を征服併呑すると共に当初からその要地に渤海人を派置して彼等を強力に統治する政策を採つたこととなる。渤海が純通古斯系靺鞨諸族の地を直轄領として府州県制に編成してゐたことは先に一言したが、此の府州県制の施行が何年の頃に行はれたものかは確知し難いにせよ、とにかくかうした強力な直轄政策の前提的処置として征服占領に続く渤海人の現地派置は充分考へられる所である。寧ろかく解してこそ渤海の純通古斯系靺鞨諸族に対する統治方針が矛盾なく理解せられるのである。拂涅や越喜に対しても鉄利の場合と同じく渤海人が派置せられてゐたことは云ふ迄もあるまい。そして此の様に渤海人が派置せられて統治に当つてゐた以上、靺鞨諸族の行動はすべて彼等渤海人の指揮認許の範囲内に限られて行つたと見なければならぬ。

北方民族の中国品入手に対する熱望は、族別、時代別を問はず頗る熾烈であり、中国への入貢は遠蕃が此の目的を遂げる最大の方法であり、機会でもあつたのであるから、征服せられた靺鞨諸族が渤海によつて全く朝貢を禁止せられたならば、中国品入手の途を断つものとして深く渤海を怨み、その統治は却つて難しくなる恐れがあつた。さうした恐れを避け

る為めには、渤海自身の中国輸入品を増大して、或は彼等に売出すか、或は彼等の忠順分子にその恩賞として賜与してその熱望を満してやる外、時にその中国への直接入貢をも許してやる必要があつた。然し被征服者であり、直轄領民となつた彼等の独自の入貢は許さる可きでなく、渤海人に従行し、渤海国民の名に於いて入貢せしむ可きであり、又その入貢は渤海に忠順な者にのみ許して憧れの中国品を獲得せしめ、それによつて靺鞨諸族に対する統治力の強化浸透をはかる可きであつた。何れにせよ、純通古斯系靺鞨諸族を併呑して後ちの渤海の中国輸入品は増大す可き必然性をもち、朝貢・私貿易の両形態に於ける対中国貿易は恐らく右の必然性に沿つて飛躍的に増進して行つたものと思はれる。その詳しい実証的検討は渤海史の問題として此所に取扱ふ裕りはないが、少くとも貿易の飛躍は紛れない事実であり、その一面に靺鞨諸族に対する渤海の統治力の強化が察せられるのである。尤もかうした渤海の統治力の強化、体制の整備が何の波瀾も無く一直線に進められたと見るのは妥当でない。久しく抵抗を続けた純通古斯系靺鞨諸族が敗滅後も尚蠢動を繰返へしたことは充分考へられる所であり、先掲記事の鉄利人の日本への亡命もさうした蠢動の一余波と解せられるのであるが、然し局部的な問題はあつたにせよ、大勢的には渤海の統治力は年々強化したのである。占領直後に於ける渤海人の現地派置から府州県制施行へと発展して行つた渤海の直轄政策の強化は此の大勢的な成功を証するものであるが、更に此の成功を年代的に察見せしめるものは渤海の首都移転である。

渤海の前身たる震国の首都が何処であつたかは学説紛々たる有様であるが、後ちの渤海の中京顕徳府であらうと一般に説かれており、その中京顕徳府の所在に就いても、今の敦化附近ならんとする説、今の華甸県の蘇密城ならんとする説等があるが、とにかく此の首都を文王欽茂が今の東京城なる上京龍泉府に北遷したのは、その即位の十八年、即ち唐の天宝十三年で、渤海が靺鞨諸族を併呑してから十年あまり後ちであつた。顕徳府の地は疑ひもなく濊貊系靺鞨の住域であり、[註158] 従つて渤海人の本土の一部であつたが、龍泉府の地は明かに挹涅靺鞨の住域で、純通古斯族の一要地であつた。[註159] 濊貊族に

よつて建てられ、それを支配階級とする渤海国の首都が純通古斯系の、然も嘗て渤海の北進に強力に抵抗した拂涅の地に遷されたのは、その地が全く戡定せられて治安上の心配がなくなり、渤海の行政体制下に安定して内地化してゐた為めでなければならぬ。蓋し渤海は彼等を併呑してから十余年でその内地化に成功したのであつて、それは拂涅に限らず、越喜・鉄利等に就いても略々同様であつたと思はれる。尤も鉄利靺鞨の間には、後述する如く、反渤海精神が相当根強く残存してゐて時折表面化したこともあるが、とにかく一応内地化して鉄利府六州に編成せられたこと、先に一言した如くである。

渤海は建国の初め唐から受けた冊封に従つて震国と号し、次いで先天二年（開元元年）二月、玄宗の授けた渤海郡王の冊封に従つて渤海と呼ぶこととなつた。所で此の渤海は開元・天宝時代を通じて渤海靺鞨と呼ばれ、此の称呼は尚その後にも尾を引いて続いてゐる。然し天宝以後は渤海靺鞨の呼称は次第に廃れ、単に渤海と呼ばれることが多くなり、遂に全く靺鞨を棄てて専ら渤海だけとなつてゐる。渤海の始祖大祚栄は粟末靺鞨の出身であり、又此の国を建国し支持した民族は濊貊系たる粟末・白山の両靺鞨と高句麗人とであつたが、その主力をなし大多数を占めてゐたのは粟末・白山の両靺鞨であつた。従つて彼等が合体して渤海国なる一勢力を構成した際、此れが靺鞨族の集団として渤海靺鞨と呼ばれたことに何ら不思議はない。然し此の渤海靺鞨なる呼称が天宝以前に盛用せられ、それ以後漸減して靺鞨の名を消し去り、専ら渤海とのみ称せられるに至つた事情は当然考究せらる可き問題であり、又渤海の北進と大きく聯関しても居るので、此所に簡単に考説しておく。

開元時代には靺鞨の名を以て呼ばれる独立の勢力が渤海の外にも尚多数あつて互に並立の関係を有してゐた。そのうち唐と深い関係を有つたものとしては黒水・拂涅・越喜・鉄利等の諸大部や達姤・虞婁等の比較的弱小勢力の名が知られており、更に思慕・郡利・莫曳皆・窟説等の遠隔諸部も殆んど没交渉に近い関係に在り乍らその存在を知られてゐた。渤海

が渤海靺鞨と呼ばれたのは、此の国が上述の靺鞨諸族と並立する一団の靺鞨勢力と見なされてゐたからでなければならぬ。即ち渤海靺鞨なる呼称は此れと対等に並立する諸靺鞨の勢力が群在してゐて、此れと区別する必要から生れたものであつたのである。勿論、渤海が群を抜く強大勢力であつたことは充分認められてゐて、渤海を指すに単に靺鞨とも呼び、又単に靺鞨と云へば渤海を意味し、明かに渤海を靺鞨諸族の代表勢力とする用法が行はれてゐたのであるが、それは強弱大小の差を示すまでであつて、渤海を或は渤海靺鞨と呼び、或は単に靺鞨と呼んだ時人の意識の底に、その抜群の実力を認め乍らも尚此れを他の諸靺鞨と並立する一勢力として扱ふ見方の存してゐたことが窺はれるのである。[註160] 所が開元末から天宝初年にかけて唐と深い関係をもつてゐた拂涅・越喜・鉄利等の諸大勢力を併呑し、虞婁・達姤等もそれに伴つて渤海に没し、僅かに遠在の黒水の存在を許すのみとなり、又極遠の思慕以下の諸靺鞨は再び歴史舞台の埒外に押しやられて聞えなくなり、[註161] かくて彼是区別する為めの渤海靺鞨なる呼称はその必要性を失つた。歴史舞台の上に活躍してゐた諸靺鞨は悉く渤海に併入せられて一勢力に統合せられたのであるから、今や渤海と呼べば事実上満洲の全勢力を包括し、特に此れを渤海靺鞨と呼ぶ必要はなくなつたわけである。然しさればとて渤海靺鞨と呼び得なくなつたのではない。渤海靺鞨と呼ぶも何ら差支へなく、只その必要がなくなつたと云ふにすぎない。かうした場合、渤海靺鞨の使用が漸次衰へ、徐々に尾称の靺鞨が取り去られて行くとしても、尚慣習的に必ずしも必要でない尾称がしばらく存続することは当然有り得る現象である。寧ろ慣習の力を考へる時、靺鞨なる尾称の消滅は此の尾称の必要を喪つた時から可成り後年になつて起つたものと見る可きであらう。要するに、渤海靺鞨なる称呼は渤海と並立する拂涅・鉄利・越喜・黒水等数多の靺鞨勢力が独自の存在を保つてゐた時代に彼是区別する必要から生れたものであり、渤海靺鞨の尾称の靺鞨が消え去つて行つたのは、此れら並立する諸靺鞨が渤海に吸収せられ消滅して行つた結果であつて、尾称消滅の時間的経過は慣習力の作用によつて靺鞨諸勢力の消滅より稍々あとにずれてゐたと考へられるのである。従つて尾称の消滅過程が天宝末以後に初まつていることは、

靺鞨諸勢力の消滅の時期を天宝の初めと断ずる見解と何ら矛盾するものでなく、寧ろ逆に此れを支へるものと見得るのである。

以上、純通古斯系靺鞨諸族の唐への入貢消滅、鉄利人の渤海人と一団となつての日本への来投、安東都護府の燕郡城より遼西郡故城への東移、渤海国首都の上京龍泉府の地への北遷、渤海靺鞨の尾称としての靺鞨の消滅等の諸史実とその年代とを相互聯関的に考察した結果を総合するに、渤海の文王欽茂が開元二十九年より天宝二年に至る足かけ三年の間に拂涅（虞婁を含む）越喜・鉄利（恐らく西隣の達姤を含めて差支へないと思はれる）等の靺鞨諸族を併呑して直轄領とし、それら諸勢力内部の要地に渤海人を派置し、それより十年程の後ちには此れら新領有地を大きく内地化してゐたこと、黒水靺鞨を圧迫して羈縻領としたこと、かうした北進は武王武芸が強く念願し乍ら生前に果し得なかつた宿望を達成したものであること、欽茂の成功は開元二十九年の突厥の瓦解に乗じたものであること等が略々認証せられたことと信ずる。つまり渤海の靺鞨諸族の併呑は塞外の覇者突厥の瓦解が齎した東方満洲への最大影響の一つであつたのである。所で突厥の瓦解の影響たる渤海の北進、純通古斯系靺鞨諸族併呑は此れ亦極東の一大事件であつただけに、此れが更に大きな影響を諸方面に及ぼした。そしてその影響の一つが西隣の小高句麗国の上に大きく波及してゐるのである。上来、突厥と渤海・靺鞨諸族との関係に長大な考説を加へたのは、最後に此の小高句麗国の上に起つた変化を究明せんが為めの意味を多分に有つての上でのことである。

第二節　靺鞨諸族の亡命と小高句麗国の九州増領

開元二十九年、渤海が突厥の瓦解に乗じて北進を開始した時、それ迄強靱な抵抗を続けて来た拂涅・越喜・鉄利等の諸族が何ら為す所なく屈服してその支配を甘受したかどうか、又渤海が此れら諸族の内部に於いて反渤海活動を指導して来

た強硬分子を征服の際にそのまま宥恕安存せしめたかどうか、すべて疑ひなきを得ず、寧ろ相当の波瀾が捲き起されたのではないかとの推想が抱かれる。

第一項　純通古斯系靺鞨諸族の抵抗

遼代に後渤海国が滅亡して濊貊系通古斯族の歴史的生命が絶え、純通古斯系たる女直の独り天下となる以前の満洲は、久しく両系勢力の激烈な争覇舞台をなし、その優勝劣敗の反覆が満洲史の主流たるかの観を呈してゐた。そして此の争覇に活躍した濊貊系の中心勢力は扶余→高句麗、及び此の両者の子孫が合体した渤海人等で、時代的に大きく推移してゐるが、純通古斯系勢力の代表は時代によつてその名称を異にしてゐたとは云へ、何れも阿勒楚喀河流域を根拠とする一団の勢力であることに於いて一致してゐた。即ち古くは勿吉、次いでは鉄利等、すべて此の流域を根拠としたものであり、最後に大金帝国も亦此所から勃興したものであることは周知の如くである。

純通古斯系と濊貊系との抗争は、最も古くは純通古斯系たる邑婁の濊貊系たる沃沮への連寇として史に伝へられ、次いで久しく扶余の隷属下に在つた勿吉の勃興とその扶余攻滅として表れ、降つて高句麗の圧迫による勿吉の滅亡となつてゐる。[註161] かうした対立攻争の歴史が両者の間に自ら融合し難い敵視感情を醸成し、特に純通古斯系の代表となつて扶余や高句麗と華々しく覇を争つた勿吉本土の住民、即ち阿勒楚喀河流域の靺鞨に濊貊の下風に立つを潔しとせざる誇りを有たせたことは充分考へられる所である。勿吉政権潰滅後の阿勒楚喀河流域の住民は安車骨靺鞨と呼ばれ、降つて渤海建国頃には鉄利靺鞨と呼ばれる一団の勢力をなしてゐた。つまり鉄利は勿吉政権の中核をなした部族の直系である。鉄利と並ぶ越喜や拂涅の祖族も嘗ては大勿吉政権に包括せられ、此れを支へてゐた者と推測せられる。[註162] 彼等純通古斯系靺鞨諸族の渤海の北進に対する抵抗、即ち渤海建国への不参加・非協力は、その濊貊系に対する種族関係以外に、此の様な過去の宿敵的抗争が大きく影響してゐたと考へられる。果して然らば、渤海国への敵視感情は当然鉄利に於いて最も大きかつた筈であり、

事実、史書を通読するに、その対渤海活動は右の推断を充分に裏書きしてゐるのである。

契丹の太祖阿保機が精鋭を率ゐて東征し、内訌に乗じて長駆渤海の首都を陥れた時、鉄利は此の侵入契丹軍を迎へて此れに協力し　渤海の討滅に一役買つてゐる。契丹は爾後の渤海領内撹定戦に功果を挙げ得ず、やがて夥しい渤海人を駆遷して契丹の本土や遼河・伊通河流域に強制移住せしめると共に渤海の地を大部分放棄した。此の駆遷と半島方面への亡命及び純通古斯系たる女直人仲間への逃入等によつて濊貊系たる渤海人の勢力は遽に減退したが、尚その残留組は後渤海を建国し、新に勢力を得た兀惹女直の協力を得て再び満洲の支配を確保した。後渤海の復興成るに従つて鉄利も再びその制圧に帰したが、満洲の統一を終へた後渤海及び兀惹部が余勢を駆つて契丹への反繋を開始し、契丹がその保境安民の必要から後渤海（兀惹）討伐に乗出すと、鉄利は又もや契丹に与して或は基地を提供し、或は戦陣に参加し、かくて後渤海（兀惹）が潰滅すると、代つて一時満洲の覇権を握つた。この様に契丹の強大な武力を引き入れ、外力と結んで迄主家に弓を引いた鉄利の反渤海感情は只強烈そのものであつたと云ふ外ないが、然も此の外力と結んだ反抗が展開せられたのは、五代の中葉から北宋の中葉に及ぶ約一世紀にもわたる間で、彼等が渤海に併呑せられた開元末から云へば約二百年乃至三百年もの後ちに当り、彼等の反渤海感情が強烈な上に尚如何に根強く執念深いものであつたかが察せられる。かくも強烈で根強い反渤海感情が契丹の勃興迄一度も爆発を見なかつたとは考へ難い。先に鉄利人が渤海人と共に日本に来投したことを一言したが、此の来投事件も恐らくはかうした反渤海感情の爆発と聯関して理解す可きであらう。[註163]

鉄利人の日本への来投は前後二回史書に伝へられてゐる。第一回は天平十八年で、唐の天宝五年に当り、渤海が北進を開始してから五年目であつた。渤海人と行を共にし、総勢一千一百余人は「慕化来朝」と云はれてゐる如く、帰化永住を目的としたもので、亡命の臭ひが強く感ぜられる。恐らく鉄利を併呑した渤海の制圧力が強化せられて行くのを不満とした強硬分子が派置せられてゐた渤海人の一部を抱き込んで反抗し、事敗れて遥々日本に亡命したのであらう。険海を乗越

えて日本に亡命したのは、中国その他陸続きの地に亡命し難い事情があつた為めではないかと思はれる。

第二回の来投は宝亀十年で、前回から三十三年の後、唐の大暦十四年に当る。同じく渤海人と鉄利人との一団で、日本に到達した数は三百五十九人であつたと伝へられてゐる。[註164] 此の場合もやはり亡命で、恐らく先回と同様反渤海的行動に失敗してのことではないかと思はれる。かうした失敗の反覆の底に流れる根強く強烈な反渤海感情を想定してこそ、契丹勃興以後に於ける鉄利の同国民相伐つが如き反渤海活動も、さもある可きこととして理解せられるのである。拂涅や越喜も、その度合の程は別として、同じく相当の反抗を示したに相違ない。抵抗に関する史料は不幸にして見出せないが、渤海の併呑に際しては相当激しく争ひ、力及ばずしてその陣門に屈したと云ふのが、拂涅・越喜・鉄利等が滅ぼされる際の真相であつたと推断せられるのである。

第二項　純通古斯系靺鞨諸族の亡命

隋初、大高句麗国が当時の粟末靺鞨の中心部をなし、又嘗ての扶余国の都でもあつた扶余地方を征服併合した時、此れ迄高句麗の進出に反抗してゐた巨魁、厥稽部の酋長突地稽は部下千余戸の集団を率ゐて隋の営州に来投しており、[註165] 隋末、高句麗の支配より脱した扶余靺鞨が唐初に又もや高句麗に征服せられると、反抗派の中心をなしてゐた烏素固部数百家が集団的に唐の営州に亡命してゐる。[註166] 同じ濊貊系たる高句麗と粟末靺鞨との争に於いてさへ、その敗北側の中心的反抗派はその原住地に安存するを許されなかつたことが知られるのである。果して然らば濊貊系たる渤海の北進に強烈に抵抗した純通古斯系靺鞨諸族中の強硬分子は一層その屈服後の安存が許され難かつたであらう。最後迄その完全屈服を免れ、羈縻的な藩属に止まり得に黒水靺鞨の場合を除き、直轄領土に併入せられた拂涅・越喜・鉄利等の諸族の中で反渤海活動の中心となつた有力分子は、敗北に際してどうその身を処したであらうか。その行方が新に考究せらる可き問題となる。勿論、捕斬や囚虜の憂目にあつた者もあらうが、先に挙げた厥稽部や烏素固部の例から推して、此の時にも少からぬ亡命集団が

あつたのではないかと推想せられ、此の点の検討が必要な様に思はれる。かう考へて後ち、新・旧両唐書が安東府の羈縻州として地理志に列記してゐる州数の相違を再顧し、州名その他の点に詳察を試るに、そこから右の亡命に対する推測を裏書きする幾つかの重大史実を新に抽出することが出来る。

旧唐書の地理志が挙げてゐるのは四都督府十州、計十四州で、此れを安東都護府の羈縻州なりとしてゐるのに対し、新唐書の地理志が挙げてゐるのは九都督府十四州、計二十三州で、此れを安東都督府に隷すと記してゐる。即ち州数とその管轄機関名とに大きな違ひを見せてゐるのである。ここで先づ問題となるのは州数の相違である。両者の数の差は九州であるが、此の九州を除いた残りの十四州の名称は両者完全に一致してゐる。従つて新唐書の二十三州は旧唐書の十四州に九州を加へたものとなる。九州の内訳は五都督州・四刺史州で、その州名を採録すると左の如くである。

(1)　都督州　衛楽・舎利・居素・越喜・去旦。

(2)　刺史州　諸北・鉄利・拂涅・拝漢。

此の九州に就いて最も注目す可きは、純通古斯系靺鞨の族種名たる越喜・鉄利・拂涅と全く同じ州名が含まれてゐることである。此の族種名と同じ名の州名は必ずや此の族種名を負うたものに相違なく、それは拂涅・越喜・鉄利等の靺鞨諸族が渤海に征服併呑せられた時、最後迄抵抗した強硬分子で、原住地に留まり得ずして亡命し来つた集団を以て置いた州であらう。独り黒水州の名が無いのは、併呑から免れ得た黒水靺鞨として集団的亡命を出す迄に至らなかつたからであらう。

拂涅靺鞨は瑚爾哈河流域以東日本海に至る広大な地域に拡がり住して大拂涅とも呼ばれ、越喜靺鞨は瑪顔河流域に、鉄利は阿勒楚喀河流域に拡り、何れも純通古斯系靺鞨中の最有力集団であつた。新唐書の渤海伝によつて彼等が渤海に編入せられて後ちの州数を検するに、渤海十五府・六十二州、一府平均四州強なるに対し、[註167] 越喜は懐遠府九州、鉄利は鉄利府

六州、拂涅は東寧府五州となつてゐて、何れも全国の平均よりも多い州数を有つた府であつたことが知られる。尚私考に依れば、鄭部府二州は鉄利靺鞨、定理府二州・安遠府四州・率賓府三州及び龍泉府三州の地は悉く拂涅靺鞨の地に置かれたものと解せられるから、結局、拂涅の地は十七州、越喜の地は九州、鉄利の地は八州に編せられてゐたこととなり、[註168]その合計三十四州は渤海の全国六十余州に対して過半に達してゐた。勿論、州数の多少がそのまま面積や戸口の多少を示すものとは云へないが、それにしても彼等が極めて広大な地域に跨り住し、戸口も決して弱少でなかつたことを窺ふ参考にはなるであらう。かうした広大な地域に跨り、戸口総数も少く無かつた彼等の内部は数多の部族に分れてゐた筈である。諸北・拝漢・衛楽・舎利・居素・去旦等の六州はかうした彼等内部の有力部族の名を負うたもので、やはり鉄利・越喜・拂涅等の州民となつた者達と共に来投した亡命集団を以て置いた州であらう。靺鞨族種の名称たる鉄利・越喜等も恐らく元来は此の族種内の一部族の名称で、それが特に強大となつて族種の代表的勢力に発展した為め、此の部族を含む族種の名称としても使用せられることとなつたのではないかと思はれる。何れにせよ、新唐書に加へられてゐる九州は、在郷時代に反渤海活動の中心又は先鋒をなし、渤海の併呑に強硬に抵抗した末、終に亡命せざるを得なくなつた者を安置する為めに設置した州であつたと推断せられるのである。従つて此れら九州の設置は天宝初年の頃であつたと見る可きである。又亡命は右の九州に置かれた者に限られてゐたわけではなく、稍々後年ではあるが日本にも来投した例から推して、尚併呑を免れてゐた黒水や朝鮮、或は西北の室韋方面等へ散走した者もあつたかも知れない。

第三項　小高句麗国の九州増領

新唐書の地理志に加へられてゐる九州は渤海の北進に抵抗して敗れ亡命し来つた者を以て天宝の初年頃に設置したものである。それらの位置に就いて見るに、鉄利・拂涅の二州は遼河の流域に在り、越喜州は遠く東遼河の北方に離れて存してゐたこと、先に詳しく論証した如くである。他の六州の位置は現在知る由もないが、大体右の三州を含む南北に長大な

地域に聯綴して置かれてゐたものと見て大過無い様である。遼代の銀州は今の鉄嶺の地に比定せられ、遼史巻三八地理志・東京道の銀州の条に依れば、延津・新興・永平の三県を管してゐたと云ひ、新興県の条には

新興縣。本故越喜國地　云云。

とあつて、此所が越喜国の地であつたと記してゐる。遼史・地理志の東京道の記事が杜撰の甚しいもので即信し難いことは定評の如くであるが、此の場合、謂ふ所の「越喜国地」が上述の亡命越喜靺鞨の置かれた地を指してゐるものと見て、九州中の一州若しくはその管下の一県が此所に置かれてゐたことを窺知する史料とすることは差支へないのではないかと思はれる。渤海国の北進の結果、小高句麗国領外の満洲の地は殆んどすべて渤海国に没入して終つたのであるから、彼等亡命者の大群を満洲方面に置くとすれば、小高句麗の西境から北方に延びる右の地域以外に適地が無かつたわけである。

九州に編置せられた亡命靺鞨が反渤海派の強硬分子であつたとすれば、彼等は当然親唐派の中心であり、又親突厥的でもあつた筈である。従つて先に掲げた入唐表に見える頻貢靺鞨の主体も外ならぬ彼等であつたと見て差支へない。突厥亡びて今やその支援を恃み得なくなつた彼等反渤海派が最も頼みとする亡命先は唐以外にない。恐らく彼等は唐の庇護を期し営州を目指して郷土を出奔したのであらう。然し唐側では慓勇を以て鳴る彼等の大群を集めて中国の内地に置くことに大きな危惧を感じたであらう。先に大高句麗を討滅した際、駆遷した大群の高句麗人を中国の西北・西南・東南各方面に広く散置してその団集を防いだ先例に見られる唐の警戒心は此の際にもやはり大きく動いて居たに違ひない。高句麗人の内地駆遷はいはば反唐派に対する強圧処置で、囚虜扱ひに近いものであつたから、思ひ初つた強制分散を敢行するを憚らなかつたが、亡命靺鞨人は親唐派の来投で、此れを囚虜の如く分散せしめることは彼等から庇護を期待せられた大国唐の名誉にかけて避けなければならなかつた。さればとて集団安置をする為めにはその地域の選定を慎重にし、成る可く境外の地を充てる可きであつた。駆遷高句麗人の場合、中国の西北・西南・東南等の僻地をその散置地域に充て乍ら東北のみ

は逆に散置地から除いてゐた。それは東北は即ち彼等の故郷たる滿洲に連る地であり、從つて反唐派の中心をなす彼等駆遷高句麗人を此所に置けば、潜かに滿洲に残留する同胞と通謀して唐に刃向ふ危険があつたからである。所が亡命靺鞨人は親唐派であり、又滿洲の支配者たる渤海に逐はれて亡命した者であるから、唐に寇害をなす恐れも、在滿の同胞と結んで唐に対する不穏の行動をなす心配も無かつた。かうした事情から唐は彼等亡命靺鞨人を集団的に安置し、然もその地を彼等の郷土に連接する上述の地方に選んだものと思はれる。

次に亡命靺鞨人九州の帰属に就いて考へるに。旧唐書が十四州を安東都護府に隷すとしてゐるのに対し、新唐書が右の九州を加へた二十三州を安東都督府に隷すとしてゐることに先づ注目す可きである。新唐書巻四三地理志・羈縻州の項には更に此の二十三州に就いて

高麗降戸州十四・府九。

とあつて、二十三州の民をすべて高句麗の降戸なりとしてゐるが、此れは明かに誤りで、小高句麗の本来の領土たる十四州が大高句麗の降戸であり、濊貊系の高句麗人であるが、九州は亡命の純通古斯系靺鞨人である。然らば何故かかる誤伝を生じたのか。新唐書一流の粗雑な編輯にその一因があることは認めなければなるまいが、更に此の粗雑な編輯の新唐書にその誤りを犯さしめる素因を提供したものがあつたと見なければならぬ。そしてその素因と認む可きものが上述の安東都護府と安東都督府との相違の中に見出されるのである。

開元以後の安東都護府は遼西に在り、初め燕郡城に治し、天宝二年に遼西郡故城に遷り、通古斯系諸勢力の羈縻に当つてゐた。二十三州の州数は天宝以後のことであるから、遼西郡故城時代である。十四州の州数はそれ以前であるから、開元二十九年以前であつたこととなる。つまり旧唐書・地理志の十四州と新唐書・地理志の二十三州との相違は、両志が取上げた年代の相違に由つて生じたものである。所で新唐書の二十三州は都護府ではなく、都督府の所隷であつたと明記せ

られてゐる。安東都督府は遼陽に在つて、その長官の都督は小高句麗国王が唐の官吏として此れを帯し、従つてその統督範囲は広く小高句麗国一円に及んでゐた。従つて「隷安東都督府」とは「隷小高句麗国」と云ふことに外ならぬ。即ち純通古斯系靺鞨の亡命者を以て新に置かれた九州は、濊貊系たる高句麗人の国「小高句麗」の領土に編入せられ、従つて彼等は高句麗国民に加へられたわけである。此れが杜撰な新唐書をして、純通古斯系靺鞨人の九州を加へた二十三州を以て軽卒にも「高句麗降戸」として一括書き伝へしめた所以であつたと思はれる。

小高句麗国は純通古斯系九州の増領によつて州数・戸口数を増し、更にその領域も従来の北界たる今の鉄嶺附近より遠く北方の東遼河の北、今の懐徳又は長嶺県附近迄拡大し、西方に向つても遼河の線より若干右岸地域に張出すこととなつた。但しその統治力は鉄利州や拂涅州の如く従来からの領土内附近に置かれた諸州に対して強大で、越喜州の如く界外遠北の地に置かれたものに対しては緩漫であつたのではないかと思はれる。小高句麗国の末年、即ち契丹の阿保機が勃興した頃には、鉄利・拂涅等の諸州民は小高句麗の原住民と同一に見なされてゐるのに対し、越喜州方面の州民は純通古斯系として新に登場して来た女直と同一に見なされて居り、[註16]かうした相違の生成は小高句麗国の此れら諸州に対する長年の統治の仕方の相違に由つてゐるのではないかと思はれるのである。恐らく鉄嶺以南の諸州は本土化し、以北の諸州は羈縻地化してゐたのであらう。

建国以来、突厥・靺鞨（渤海）・半島等への国民の分投が相次ぎ、民族的消耗の兆が著しかつた小高句麗は、突厥の滅亡と此れに乗ぜる渤海の北進とによつて生じた純通古斯系靺鞨諸族の大群の亡命を迎へ入れ、唐の支援の下に此れを新な領州領民に加へ、その一部を漸次同化して些か国土を充実せしめるを得たのである。

第三節　渤海の扶餘地方占領と小高句麗国

小高句麗国は純通古斯系靺鞨諸族の九州を増領することによつてその領域を遠く東遼河の彼方、懐徳・長嶺の線に迄拡大したが、その北方は渤海が占領して扶余府を設置したので、小高句麗国は東と北の二面で渤海国と接境することとなつた。以下、小高句麗国研究の立場から渤海の扶余地方占領に就いて簡単に考察しておく。

第一項　渤海国扶余府の位置と管域

新唐書巻二一九渤海伝の十五府六十余州に関する記事のうち、扶余府の条には

扶余故地為扶余府。常屯勁兵扞契丹。領扶・仙二州。

とあつて、十五府の一たる扶余府に就き

(1) 旧扶余王国の故地に置かれたものであること。

(2) 常に勁兵を屯して契丹に備へてゐた軍事上の要地であつたこと。

(3) 僅かに二州を領するのみで、領州の最も少い府であつたこと。[註170]

等を伝へてゐる。

先づ府治の位置から見るに、右の第一は此の点を記したものであるが、只此れからだけでは明かでない。然し幸に諸先達の位置究明の論考が数多く出されてゐて、今の農安の稍々西南の地に当ることは殆んど確定的に立証せられてゐる。[註171] 異説として今の八面城なる遼の通州なりとする意見もあるが、[註172] 此れは誤りである。八面城の地は今の懐徳・長嶺両県よりも南に在り、その位置からして亡命の純通古新系靺鞨族を以て置いた九州の範囲内に属してゐたことが明かであり、従つて小高句麗国が九州増領によつて北方に拡大した新領土内に在つた。此の様に小高句麗の領土であり、反渤海感情に煮え沸

つて居た亡命純通古斯系靺鞨族の新住地となつてゐた所に渤海の府州がたやすく置かれ得たとは到底考へられない。又渤海の扶余府は契丹扞禦の勁兵が常屯せしめられてゐたことから窺はれる如く、西方の遊牧勢力と北満奥地とを結ぶ交通幹線上の要地であり、然も両勢力の接会点をもなしてゐた。今の農安の地は正に此れに該当する要地として史上に重きをなしてゐるが、八面城、即ち遼の通州がさうした要会地をなしてゐたことは、歴史上にその証佐を求め難く、又地理的にも考へ難いことである。勿論、誤つて通州説が提出せられたに就いては、此の誤りを犯さしめ易い因子があつたわけであるが、それに就いては嘗て詳考してゐるので[註173]省略する。

渤海の扶余府の領州は府として最少の二州で、此の点から推して府域は広くなかつたと解せられる。勿論、州数の多少がそのまま府域の広狭を示すものとは云へないが、それにしても府制の最低たる二州にすぎなかつたことは、府域を広しと見ることを許さない様に思はれる。飜つて小高句麗国の九州増領後の北界を再顧するに、それは遠く東遼河を越えて懐徳・長嶺を結ぶ線迄包括し、従つて今の農安の稍々西南を治所とする扶余府が統轄す可き余地は、地理的自然条件から見て、殆んど伊通河の下流域に限定せられて来る。恐らく渤海の扶余府は伊通河の下流域を管轄する比較的狭少な府であつたのであらう、新唐書の渤海伝には旧扶余王国の故地を扶余府となすを云つてゐるが、その実は扶余王国の一部にすぎなかつたのであつて、それが特に「扶余故地」と云はれたのは王都の地とその附近とであつたからであらう。扶余府の地は広くなかつたが、その占領は満洲史上に大きな意味を有つ事件であつた。此所は西方の遊牧勢力と接し、東方奥地に住む純通古斯系靺鞨諸族の遊牧勢力及び中国への出口に当り、南は小高句麗の北境と隣接し、扶余府の地がどの勢力によつて確保せられるかは、直ちに此の方面の情勢に大きな影響を与ふ可き地点に在つたからである。

第二項　渤海の扶余地方占領と小高句麗国

渤海の扶余地方占領に就いて第一に究明す可き最大の問題点はその占領の年次である。勿論史伝の記録はないので、そ

の大体を推定する外なく、その推定の手掛りは此所が奥地に住む純通古斯系靺鞨諸族の遊牧勢力及び唐に通ずる往来の出口であり、その関門であつたと云ふことである。先掲入貢表に見える靺鞨諸族の後半期の入唐が此の地を経由するものであつたことは詳論した如くであり、又渤海に併呑せられた靺鞨諸族の反抗分子が亡命した径路もやはり此の地に由つたものと思はれる。所が天宝五年に当る我が天平十八年には反抗諸靺鞨の中では最も西方の阿勒楚喀方面に拠り、従つて扶余の地に最も近く、逆に日本に最も遠かつた鉄利人が険海を越えて遥々日本に来投しており、それより三十余年後にも再び来投して居る。然も逆に唐側に入貢或は亡命した例は、特別の存在をなしてゐた黒水を除く外、天宝末年に至るまで、全く伝へられてゐない。此れは彼等が併呑せられたこと以外に、その関門たる扶余の地が渤海に占領確保せられ、強大な兵力の配置を以て固く遮断せられて終つた為めと見る可きであらう。果して然らば、渤海の扶余地方占領はその靺鞨諸族併呑の北進と略々時を同じくして行はれたものと解せられる。

渤海が占領する以前の扶余地方は、九州増領によつて小高句麗が新に拡大した領土、即ち鉄嶺方面から北、懐徳・長嶺の線に至る地方と共に、復興突厥の所領であり、突厥は此の扶余地方を握つて奥地靺鞨に対する羈縻権を確保し、一時は黒水に迄吐屯を置く程の勢力を及ぼしてゐたのであつて、此のことは此れ迄の論説の各処に置いて逐次考証し来つた所である。つまり此れらの地方は突厥領土の東端をなし、それが突厥の瓦解後、濊貊系の一大拠点たる扶余地方は渤海に没し、長嶺・懐徳以南は反渤海強硬分子の亡命入住地として小高句麗の所領に入れられたのである。

奥満洲に拠る純通古斯系靺鞨諸族の長年にわたる反渤海活動は常に突厥又は唐などの強大な外部勢力と結びその支援によつて渤海を制せんとする方策を重用してゐた。彼等の気力を奪ひ叛意を弱めしめる為めにはかうした外部勢力との聯絡を固く断つ可きであり、それには扶余地方を占領確保してその出入を遮断しなければならなかつた。渤海の扶余地方占領には、同族の糾合、遊牧勢力の東進阻止等の外に、かうした純通古斯系靺鞨諸族の経略を助ける意味をも含ませられてゐ

たものと思はれる。尚此の占領確保の成就する以前に亡命した夥しい靺鞨人は、その強烈な反渤海感情の外に更に故国を逐はれた深い怨をも抱いて傍近の地たる長嶺・懐徳以南の満洲西部に拠ることとなつた。彼等が故郷に残留する同族と潜かに謀を通じて内外より起つは渤海に取つて特に警戒す可きことであり、その危険性は充分に考へられることであつた。扶余地方の占領確保はかうした聯絡を断ち切る意味でも亦重要であつたのである。

九州に編成せられた亡命靺鞨人と事を構へることは、やがてその主権を握る小高句麗と紛争を起し、延いては更にその宗主国たる唐とも紛争を捲き起す恐れがあつた。渤海としては彼等亡命靺鞨の動きをよく監視する必要があつたであらう。史を検するに、彼等亡命靺鞨人が渤海と問題を起した形迹は認められず、少くとも大事件となる様なことは無かつたらしく解せられるが、その裏には渤海の扶余地方占領と此所を基地とする対策との功が与つて大きな力をなしてゐたものと思はれる。

註

154 史淵三五輯所載の拙稿「勿吉考」参照

155 史淵四一乃至四三輯所載の拙稿「粟末靺鞨の対外関係」参照

156 前出「粟末靺鞨の対外関係」参照

157 帝国学士院記事二巻三号所載の拙稿「後渤海の建国」参照

158 顕徳府が金毓黻氏の云ふ如く蘇密城の地ならば粟末靺鞨、津田博士の説の如く敦化地方ならば白山靺鞨の住地であつたこととなる。

159 上京龍泉府地方は虞婁靺鞨の拠つた地と推定せられ、虞婁は拂涅靺鞨の一派であつたと解せられる。この推定に就いては折あらば詳しく論述したい所存である。

160 靺鞨なる言葉は、隋以後に於いては、高句麗人以外の在満通古斯族の凡ゆる族派を呼ぶ中国人側の用語として用ひられたものである。但しその使用は大體唐代迄で、五代以後は渤海と女真（女直）とが用ひられ、大體前者は濊貊系（此れに同化した純通古斯系を含む）を指し、後者は純通古斯系（此れに同化した濊貊系を含む）を指してゐる。

161 此れら諸族の名は新唐書の伝に見えてゐる。彼等は松花江を容れる地点附近、即ち黒水靺鞨の東北限界から更に下流の黒龍江流域一帯や日本海沿岸に住んでゐた極遠の住民で、伝に此れらの諸族に就いて「皆不能自通」とある如く、直接唐に

入貢することはなかつた、唐がかうした入貢絶無の極遠居住民に関する知識を得たのは、嘗て考説した如く、開元十四年黒水靺鞨の住地に都督府・州を置き、鎮押の為めに唐官を差置した結果である。即ち黒水靺鞨の地で唐官が聞知した所を報告したのが新唐書の伝に採入れられたのである。渤海が純通古斯系の靺鞨諸族を併呑した際、黒水靺鞨のみは此れを直轄領に併入するを得ず、僅かに此れを外より羈縻する程度に終つた。従つて此の黒水を越えて更にその背後の地に遠在する上述の諸族を併呑し得た筈はない(然し渤海が北進して鉄利・越喜・払涅等の諸靺鞨を直轄領に編入すると、彼等の独自的入貢を抑へたのみならず、更に黒水の入唐をも嘗ばずして著しく此れを牽制する態度に出たものの如く、天宝以後の黒水の入唐は次第に遠のいてゐる。かうした奥地靺鞨と唐との聯絡の杜絶は自ら黒流江下流域に住む所謂遠蕃の消息を絶たしめることとなつた。満州の東北極辺に位する黒流江下流域や江口附近の日本海沿岸は古より此の時代に至る迄未だ歴史舞台に仲間入りする迄にはなつてゐなかつた。思慕以下の諸部がその名を知られたのも彼等の歴史的活躍を通じてでは無く、只黒水靺鞨を極限とする以内の歴史的諸勢力と唐との関係が一時著しく緊密化したことに絡つて遇然的に伝名の機会を恵まれたにすぎない。渤海が強大となつて満州の歴史的舞台を統合し、外部勢力の領内浸潤を許さなくなると共に彼等の名が聞えなくなるは当然のことであつた。消息が絶えた以上、中国側として此れらの極遠靺鞨諸族と渤海とを対置して

突厥の瓦解・渤海の靺鞨諸族併呑と小高句麗国の九州増領

162 163 164

区別する必要もなくなつたわけである。尤も突厥の吐屯差置や唐の鎮押官差置に続く渤海の北進、特に黒水靺鞨の羈縻は、自然の勢としてその先進文化を黒水から更にその東方の遠蕃にも波及せしめ、殊に渤海に於いて年々成長発展した中国文化の華は黒水を越え黒龍江に沿つて浸透し、彼等極遠の未開族に大きな制戟を与へたことと思はれる。窟説部が渤海末年から西南進を開始し、渤海滅亡後の満州に入つて大活動を展開し、此所に此の極遠の地を歴史舞台の中に加へる発展を開いてゐるのは、かうした中国文化の直接又は渤海を介しての奥地浸潤の影響の尤も顕著な表れであつたと思はれる。以上、濊貊系と純通古斯系との対立抗争に就いては、前出の「勿吉考」、「粟末靺鞨の対外関係」、史淵三四輯所載の拙稿「扶除国考」等の外、未発表の「挹婁即粛慎考」等参照。尚「扶余国考」に就いては補訂を出したい所存で、稿を了へてゐる。靺鞨諸族と勿吉政権との関係に就いては未発表の「靺鞨七部成立の由来」に於いて詳考してゐる。

鉄利の反渤海活動に就いては別に専考の一稿を組む必要を感じてゐる。史淵二九乃至三三輯所載の拙稿「兀惹部の発展」中に若干触れてゐるので参照を乞う。

続日本紀巻三五 寶亀十年九月庚辰の条に

敕　渤海及鉄利三百五十九人。慕化入朝。在出羽国。宜依例給之、但来使輕微不足為賓、今欲遣使給饗。自彼放還。其駕来船、若有損壊。亦修宜造。帰蕃之日。勿令留滞

とあり、更に九月癸巳の条にも此の三百五十九人に関する記

事がある。

165 史淵四五輯所載の拙稿「隋唐に帰属せる粟末靺鞨人突地稽一党」参照

166 前註の論文の附説「唐に来帰せる粟末靺鞨烏素固部」参照

167 新唐書巻二一九渤海伝参照。尚同伝には六十二州とあるが、実際そこに列挙せられてゐる州名は六十しか無く、脱落のあることが知られる。六十二州中の三州は独奏州と云はれる中央直隷の州で、どの府にも属しないから、十五府の所管は五十九州となり、一府平均四州を下廻つてゐる。

168 前出「後渤海の建設」、史淵三六・三七合輯号所載の拙稿「靺鞨七部の住域に就いて」等参照

169 此のことに就いては契丹の太祖阿保機の遼東経略を中心として更めて考説する。

170 渤海の府は二以上の州を領して中央に直隷する地方統治の最高機関であつた。

171 扶余府に関する学説に就いては、史淵四九・五一・五二輯連載の拙稿「渤海の扶余府と契丹の龍州・黄龍府」参照

172 前註に同じ

173 前註に同じ

The collapse of Türküt (突厥), the annexation of Mo-ho (靺鞨) tribes by Pu-hai (渤海国) and the increase of nine provinces in Small Kao-kou-li (小高句麗国).

Kaizaburo Hino

It was an aim of Pu-hai Kingdom, soon after her founding

(A.D.712), to conquer the pure Tungus (通古斯) tribes which inhabited in the north of the kingdom, but the latter was, under the protection of Türküt, keeping the enemy at bay.

In the meanwhile, as the empire of Türküt, the strongest in Asia, was collapsed in A. D. 741, on account of her inner conflict, the third King of Pu-hai kingdom, mobilizing immediately his soldiers, put down Mo-ho, a pure Tungus, subjugated tribes such as T'ieh-li (鉄利), Yüeh-hsi (越喜), Fu-nieh (拂涅) and so on under his direkt control and subjected Hei-shui (黒水) too.

At this time, those who most stoutly resisted, fled into Tang (唐) to be protected

Tang settled them in the territory which spread from the basin of the Liao-ho river (遼河) to the north of the East Liao-ho river, and made them subordinated to the Small Kao-kou-li.

As the number of provinces in which they settled was nine, the Small Kao-kou li which had been of fourteen provinces, became then consisted of twenty-three provinces.

The settlement of nine provinces had been over, it is understood, by the year 743.